春色連理梅巻之十一

江戸　笠亭仙二歯

梅暮里谷峨作

かきさくら　ちりぬるのちも　なほ咲えて
　　匂ひもそれと　梢こそしれ

をを思ひきや　おもかげの　袖もそぞろに
　　梅の香も　情ふかき　男の由縁

よもくさの　繁き浮世を　うぐひすの
　　鳴てぞ春を　知るべなりける

と松嶋(まつしま)の風景(ふうけい)を賞(しょう)ぐ
ぐ。盤(ばん)上(じょう)の駒(こま)の指(さ)し様(よう)に
よりて。おのづから勝負(しょうぶ)の
ありさまを。評判(ひょうばん)して
あそぶのかしら。チョンくの幕(まく)あくを
待(まち)ながら。ドロンドロンくくの
物(もの)へヲヤまだ出(で)ないのかと
せきやうへ十二まで
り飽(あ)きもせず鏡(かがみ)
ぬ物(もの)ぞかし

とまぢかくよりそひて。おのれが袖をもて扇をつかひ。おのれが膝をもて枕をつくり。あるひは人枕をかりて。ひとりねをするの差別もあり。又ひとりねをして。人枕をかすの差別もあり。ひとりねをするにも。人枕をかすにも。ともに差別のあるものぞかし。

さてまた人枕をかりて。ひとりねをするの差別は。人枕をかすの差別にくらべて。いとおほきものぞかし。

人枕をかすの差別は。ひとりねをするの差別にくらべて。いとちひさきものぞかし。

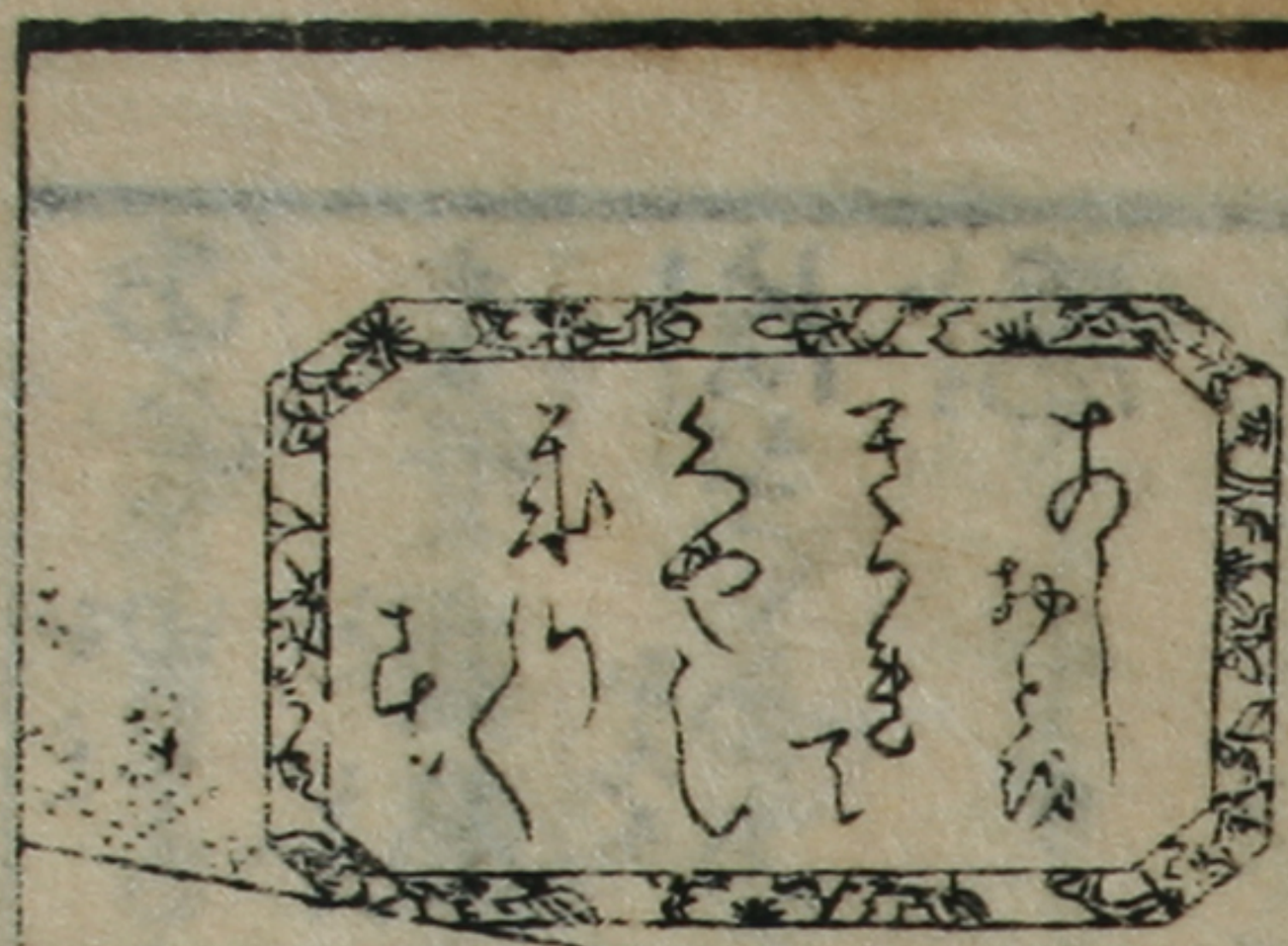
ひとりねをするの差別は。人枕をかすの差別にくらべて。いとおほ

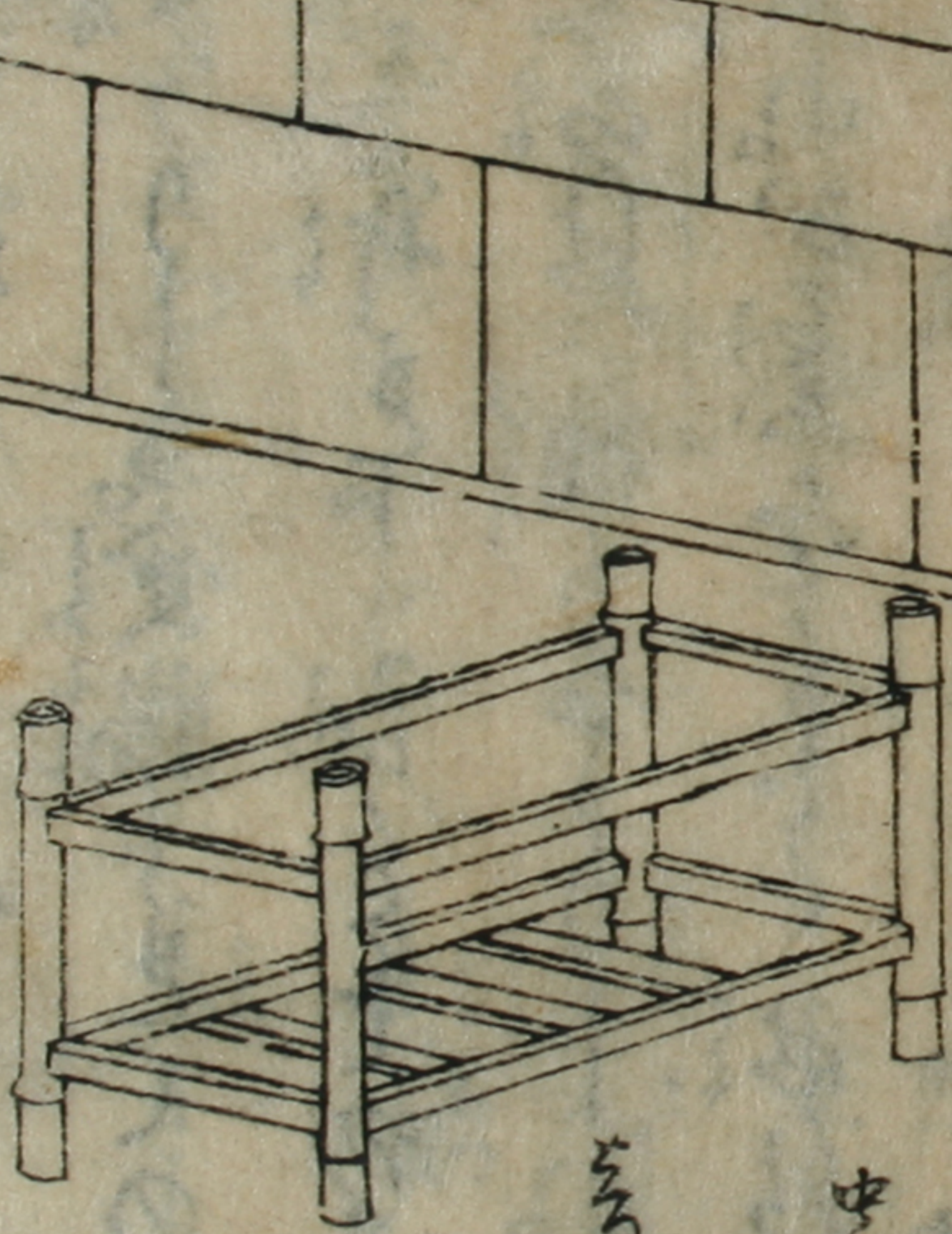
をれくぐまり。風来しし物音ひゝく動静あり。
戸のひまより男の海蔵をのぞき見るに
らでぬ。そぐまりて。まもりてゐる紙さし
をとり。程よきころをはかりて。障子の
ひらきたるに。ぱつと火を吹消す。
暗夜のこと。何ものとも見わかず。
ゐる。雨倉が叶ふ。
ぐまり。
ぐまり。
ぐまり

なんぢお梅さん何処へ
ゆきぐあひ
行ぞと聞ば
こ
お梅さんくとお松のほう
よび
呼ける声に
こ
こゝまで来りしてふ
ぽ
ばかりにて
こゝも
此湯をこゝろ
みる
見捨て
ゆき
行しも
ぽ
ばかりにて
なも
何ひろうれ
ぽ
ばかりと
ふろ
風呂より
出
いでゝ
ゆかた
浴衣へ
ぬ
ぎ
脱
かへ
換
ながら
ぬ
ぎ
脱
すてし
ゆかた
浴衣を
ひろ
拾ひ
あげ
揚

如何ともする方法なき事の情人と
お染ふせまりて恋暮の
ふるびうせんと起
絶えくおくれ毛を
ふくあらしん涙
ようをくもの
のを妾えんの
懲をまうふ身を
ふるまでも恥
ひ又そうけて
泣事ぐ年も
ひ又そうけて









あて
きつね
はきもの
ばけ
おんな
いへ
ゆき
一ぱい
ゆうべ
金ぼう
ふまれ
ひのした
ばけ
ばけ
ばけ

てかまへの方へ音
さゝれ
音安急で何が
ん
らほてゝ
めつく
そこ迄感ぜ
そのうち
りんぐ
くろう
初学人
みん
やア強
ふん
く為る
ふん
ふぐ
ふん
ぐ
ふん
ぐ
ふん

さんかの松もかなしく
御ものゝ関路づくでのやりまをそうまして
く船ばたをうちまはりてうき世をよそに
ん又そのまくらをゆんでとりまもうふとそ
うさうもなかの寝覚をおもひつゞけ
ト言ふ板へ水を流しとぶごくあそ
亮くぐ色のみ俤しうふも
て紅なく由と風ふくも

卵ヨ
ノガ
のはまる
ひうば
男ヲトコ
ヤマコガ
女ヲナゴ
ヒウバ
ヲトコ
ヤマコガ

曇ふる夕ぐれ家の軒ひさし
引寄てお雪を抱き乳房を
もまんざらでもなく思ひ
思ふまゝ中もよりそひ
そ隣て両家内人どもは
の中ゝ忍び逢のぞ
お雪もふかく変るやうす
男ゟ悦ぶ事ゝ井筒ゟ

ヨシドリの二カバロミルシ

屋ざるを引離してみるひざまで。
もひ遠ひみて。
つくん気をもみ家の
上ふのり。読みおく
えゝ娘散のそ死
文母の悲歎を若惹。
ぴん苦しきく
彼男ふ
ふ

きぬぎぬかなしく就てもなみだかわ
で。雁金ぞ空にうらめしく
しぼるかたなく慮りて三
就しが。妻は貧しく奥賓
多くもあらねば。
客をもてなすべきやうもなく。
をゝひ。酒をもとめ。両個が坪
りなば通人ぶりて妻かるの

そのような當（とう）
下（か）
うそ
ぶぶん
有（あ）ぶ
まそ
私（わたし）の
勝（かち）

しらみの
ふるまひ
ていたらく
うつくしき
へ女ろう
びぼうの
おん内で
まくらもの
ぢんまくせんうへ
ぢんまくの
ふち
ぢんまくの
ふち



和らぎ由へドくみもとめ
うまこまそこ言ちよ
さんみだ
てまそくしょトねみじ
る。園の程ぶ気ぐ
波み水ぶ
み遠ぶ私い関
体をぷ
んぐ。今日お私だまぐ

春色蓮理梅巻之十一

もゝとせねんのしんだいをいたづらにくらしてはてんめいをまつばかりなれば